

## 懸賞論文と文芸作品コンクール

### 文芸・鳳賞は堀内幸太さん「アムネジア・ドライブ」

学生部主催「懸賞論文と文芸作品コンクール」の表彰式が12月5日、生田キャンパスで行われた。柘植光彦学生部次長から入賞者に賞金、賞品などが贈られた。

最高賞である鳳賞は、文芸部門が堀内幸太さんの「アムネジア・ドライブ」(論文部門は該当者なし)。同作品はタクシー内で延々と繰り広げられる暴力描写が衝撃的な作品。講評の中で小林恭二文学部教授は「鳳賞は、堀内さん、岩下さん、辻さんの3人の争いになった。その中で堀内作品には、作者の書くことへの『執念』が頭抜けていた。気迫は、時に技術を超える瞬間がある」と評した。



▲喜びの入賞者(右上は堀内さん)

友人と同人誌を発行しているという堀内さんは「今回は3作目。法律書、心理学、哲学などの学術書からイメージが膨らんだ。暴力的な情景を、丁寧な言葉で描写することに気を配った。鳳賞が決まった際、小林先生を訪ね直接、講評やアドバイスをいただいた。今後の励みにしたい」と喜びを語った。デザイン関係の仕事に進むが、小説は書き続けていくという。

★入賞者は次の通り(敬称略)

#### ◇ 論文

鳳賞  
なし

優秀賞

- 「日本で学ぶアジアの留学生達と我々日本人」大久保祐介(経済3)
- 「買収防止策(ポイズンピル)の導入と投資家の反応」高橋健志(商4)
- 「何故消費者は価格差を受け入れるのか」入江正成(経済3)

佳作

- 「冷淡に見えるだけの都会人」佐瀬友加(文3)
- 「ホワイトバンド現象がもたらした意義—『意思表示』という新しい社会運動の形」八代純奈(文3)
- 「人間の安全保障～追究と追求」青木梨奈(経済4)
- 「社会的潜在効果による医療不信発生のプロセス—情報公開の負の効果—」甲石聖恵(文3)

#### ◇ 文芸

鳳賞

- 「アムネジア・ドライブ」堀内幸太(法4)

優秀賞

- 「屋上生まれの児は踊る」岩下修一(文3)
- 「夏に泣く女の子」辻愛(文3)
- 「二重奏」中田智子(文4)

佳作

- 「チョイス」関口博人(文3)
- 「算盤感情」吉井知行(文2)
- 「桜の法則」馬場翔一郎(経営2)
- 「高知県沖ノ島」米村創(文4)

●「背中を追って」宮路敏幸(経済4)

自己啓発奨学生・原田雄紀さん(商1)

## トライアスロンで「五輪」出場目指す

トライアスロン世界選手権ジュニア大会に出場するなどの実績を収め、2012年のロンドン五輪への出場を目指している、原田雄紀さん(商1)に12月14日、学生部から自己啓発奨学金が支給された=写真。

現在は地域密着の総合スポーツクラブを目指す「東京ヴェルディ1969トライアスロンチーム」に所属、トレーニングや遠征のほか、小学生への指導や駅伝大会運営の補助など、地域貢献にも携わっている原田さんは、「初の日本代表として臨んだ国際大会では海外選手のレベルとパワーに圧倒され、自分らしさが出せなかった。今年はジュニア(19歳以下)からU-23にクラスが上がり、エリート選手との戦いになるので、体をきたえ直し、結果を出したい」と話している。



## 全日本学生法律討論会〈質問の部〉

### 岳金虎さん（法3）が3位



18大学から約360人が参加し、12月2日に東京都で開かれた、第56回全日本学生法律討論会で、法学研究会の岳金虎さん（法3）＝写真＝が、「質問の部」で3位に入賞した。

入学時から独学で司法試験の勉強をしてきたが力を試したいと2年次から同研究会に入った。一方で、勉強だけの4年間でなく、社会に関わっていきたいと、法学部の学生約30人で「Senshu Entertainment Agency」を結成。ファッション雑誌に自身がモデルとして登場するなど、多彩な活動をしている。「目標は検察官」と語る岳さんの今後に期待しよう。

## 《緑地帯》

## レポートとインターネット

最近、インターネットによる情報検索機能の進化には著しいものがある。彗星のように現れたグーグルなどを頂点とする重層的なネットワーク社会のブラウザー・情報検索機能の拡充を目指す企業の進出によって、広範かつ多様な情報を瞬時のうちに収集できるようになった。「google」はいまや“情報を検索する”という意味を担う「動詞」となった。

必要な情報を、瞬時のうちに、必要なとき、必要なだけ収集できる。まさに情報化社会の利益を享受できるいまの学生はうらやましい限りである。

このようなグローバルレベルでの社会技術の革新によって、データとして使い得る情報を通時的、共時的に比較分析することも可能となった。地域比較もできるようになった。問題発見、因果関係の類推のための手掛かりをつかむための数量化、図式化作業の能率もさまざまなソフトウェアの開発により飛躍的に高まった。

しかし、データの質が問題なのである。だれが、いつ、どのような意図をもって、なぜ発信されたのであろうか。発信者や提供者の真の意図は何であろうか。信頼性は、確度は果たしてどうであろうか。うたかたのように現れては消える情報の海に漂うばかりなのだろうか。データの信頼性、信憑性を自ら検証するだけの力量が問われる昨今である。その上でのデータ・マイニングの巧拙が問われてくるであろう。インターネット情報をもとにした卒論や期末レポートを見ることが多い学年末、自省する昨今である。

(学生部)

## 専大松戸高・才田さん 全国高校生英語スピーチコンテストで優勝

11月11日、東京・吉祥寺で行われた「第8回全国高校生英語スピーチコンテスト」(後援・文部科学省)で専大松戸高2年の才田恵里奈さんが見事優勝した=写真中央。



24日に同校で行われた表彰式では、全国大会実行委員会副委員長のデヴィッド・ブロードヘッド氏をはじめ、予選大会実行委員長や松本英夫校長らからお祝いの言葉と表彰状、トロフィーなどが贈られ、最後に才田さんからお礼の言葉と後輩たちへのエールが送られた。

才田さんは「本当にうれしいです。将来は国際的な仕事に就きたい」と笑顔で語った。

指導した長(おさ)真司教諭は「本人の努力にとっても感銘を受けました」と教え子を称えた。

## ネットワーク情報学部「プロジェクト」発表会

### 企業人や高校生に趣向凝らしたプレゼン展開

ネットワーク情報学部の3年次演習科目「プロジェクト」の発表会が12月16日、生田キャンパスで開かれた。同学部の1、2年次生をはじめ、企業の方や高校生らが来場し、趣向を凝らしたプレゼンテーションを見学した。

※ベストプロジェクトの詳細は次号で。



▲ベストプロジェクトに選ばれた「アド♪Media」「デジタル万華鏡をつくろう」「Active Link」

## 《New Ground- 新しい見方<9>》

### 「後期・学年末試験」

小林 辰明(経済1・ジャーナリズム研究会)

高校生のそれと比べると若干短く感じられる冬休み。年末・年始の喧騒(けんそう)をゆっくりまったりと過ごしたかったが、そうも言うてはいられなかった。大学に入って初めての冬休みは、私に対してそんなに優しくはなかった。

休みを終えたこの時期、専大生はもちろん、全国の大学生が一斉に同じ問題に突き当たる。2週間の長期休暇も、その「準備」に追われるのが大学生の常なのだ。たとえバイトが忙しかろうと家の手伝いを強制させられようと、これだけは最優先事項としなければならない。学業を本分とする学生諸氏を悩ませる頭痛の種、人によっては人生をかける戦いといっても過言ではない——それが「後期・学年末試験」である。

我らが専大では、今年は1月16日から29日までを試験期間としている。ほとんどの私立大学と同じように二期制を採用している本学は当然前期にも試験はあったが、後期の試験はそれとは規模が違うように感じられる。

授業によっては冬休みに入る前からレポート提出やテストがあるので、実際にはテスト期間に入るかなり前から学生はテストに取り組まなければならない。学生としてはぜひとも単位を落とすたくない外国語科目も、テスト期間前に行われるのが通例だ。なので、テスト期間は実質1カ月に及ぶ。1週間弱で集中的に行われた中学や高校のテストとは勝手が違うのだ。

1年次生である私には、どのようなペースで取り組めばいいのかまるっきり分からない。また、テストだけではなく授業の単位の感触もいまち掴(つか)めない。どのぐらい頑張れば単位はもらえるのかなど、テストと併せて多大な不安を感じざるを得ない。

ただ一つははっきりとしていることは、明るい来年度を己の手に掴むためにも、これから挑む試験に抜かりないようにせねばならないということだけだ。それを心がければ、おのずと結果は見えてくるものなのだろう。



《マンガ》

成人式

(漫画研究同好会・おまか雄 作)

